

裏面の話題

みんなの居場所の裏面は、小学生にとって必要ではないかと思う問題、漢字、語、慣用句等々を載せていきます。ご家族の団らんの話題にしてみてください。会話が広がります。

令和7年7月18日(金)

みんなの居場所

いよいよ夏休み

子ども達も待ちに待った夏休みというところでしょうが、今日は教室から夏休みの計画がちらほら聞かれた一日でした。

我が家は家族全員それぞれに忙しく、バラバラに活動する夏となりそうです。子どもが成長するにつれてその傾向が強くなってきました。解っているものの、少し寂しさを感じています。それを埋めるべく、お盆の時期だけ両親の郷や妻の実家をお参りがてら訪問しようと思っています。

さて、夏休みというと楽しい行事や計画が多くある反面、事故や事件等も多くなる季節です。小学生が事件事故に巻き込まれることもありますよね。そういう意味では気持ちを引き締めて過ごさなければならぬ時間でもあります。可能性を否定できないトラブルとして幾つか挙げてみましょう。①交通事故 ②水難事故 ③熱中症 ④SNSトラブル...考えることがありませんね。トラブルに巻き込まれることがないように、ご家庭でも話題にして頂き、充実した夏を楽しんで欲しいと思っています。

作者に寄る添って 読書の楽しみ

数年前、宮沢賢治の「やまなし」という童話の授業。宮沢賢治の精神性や、彼の執筆した作品との関係について、触れることがとても楽しいものでした。保護者の皆様は「注文の多い料理店」をご存知でしょうか。読んだ時は、私は猫を見ると思いついてしまった。身震いしたのを思い出します。銀河鉄道の夜は難しすぎて投げ出してしまったのですが、学生時代に初めて読破しました。暗い感じがして、宮沢賢治って暗い人、なんて考えたものです。宮沢賢治は大変ナイーブな、繊細な心の持ち主だったようです。それが、作品に表れているのですが、どうも彼が生きた時代はそれを受け入れる懐の広さがなかったようです。現代、彼の作品は様々な形で見直されていることは周知の事実ですね。

さて、読書をするにあたって、その物語だけに集中するのも面白いのですが、もう一つの楽しみ方があると思います。それは、作者が作品を通じて読者に何を訴えているのか、それを探ることです。特に名作として現代に受け継がれている作品は、作者の生い立ちや考え方を探ると、非常に面白い読書ができると思います。宮沢賢治も然り、太宰治、夏目漱石、川端康成、三島由紀夫...強烈な個性ばかりですね。最近の物語も面白いですが、恩田陸さんの「夜のヒューリック」これはいつでしたか、本屋大賞を受賞した作品で青春小説ですが、恋愛などはなく、高校生が80kmの「歩行祭」の中で色々な話をするだけなのですが、私が行った「強歩会」と重なる部分も多く、共感的に読みました。この他に面白かったのは竹内真氏の「自転車少年記」、これは親友同士の成長小説というが、私自身の経験と重なることができてよかったです。城山三郎氏の「指揮官たちの特攻 幸福は代わりのない」、これはとにかく平和について考えさせられます。日本人が、ここまで追い込まれてしまった理由が分かるような本でした。

読書について私見を述べましたが、読書は大切です。読んでいると作者がそばで話をしてくれているような気がしてきます。だから読書はやめられません。

シリーズ「自分を語る」#200

平成29年7月3日、午前3時頃の腹痛の件です。

初めは「腹あたりかな。トイレに行けば治るだろう」と軽く考えていました。しかし、5分くらいの間隔で痛みが出ます。しかも痛みは強くなるばかりです。あまりの痛さで、「私は正露丸を飲みました。それでも痛みは治まりません。明け方になっても治まりません。両親も心配して起きてきました。まだ辺りは暗い。このままでは起きているのか全見当もつきません。当時、私の家は汲み取り式の便所。便の状態を確認するにがてら、事態を悪化させたようです。辺りが明るくなった時、初めて私は難治に気が付きました。トイレにトイレットペーパーに血が付いていたのです。実は、それまで下痢のように出していたのはすべて血液で、腸壁が出血していたのです。私の頭の中にすくすく浮かんだのは「赤痢」でした。腹痛が我慢できなくなり、焼酎で手を洗い、熱湯を便所に流しました。両親にはトイレを使わないようにと伝え、自分はずっと隔離を覚悟しました。両親は私の痛みの度合いを理解していませんでしたので、「取り敢えず病院に行け」と余裕でした。近くの内科医院に受診しましたが、明確な判断も下さず、痛みが続き、眩暈がしてきました。私は「これはいかん」と思い、タクシーで熊本市民病院に行きました。病院の先生は、熱は高くないので「赤痢」の可能性は否定されました。少しホッとしましたが、病気が分かりません。しかも、出血を放っておいたので、輸血の一手手前まで血が薄くなっていました。眩暈や体の震えはそのためで、即入院となりました。それから暫くの間、24時間点滴が続くことになりました。その日の夜、主治医から大腸内視鏡検査をするよう言われ、本音で待つことになりました。教員として正式採用される方月前のことです。次の日の朝、不忠義と腹痛は収まっています。腹痛というほどの極度の空腹に襲われるほどでした。「何か食べたいです」と看護師さんに告げたのですが、当然答えは「検査が終わるまで何も食べられません」とのことでした。

その日の検査は大腸内視鏡検査です。現在でも定期的に検査を受けているのですが、この時代は内視鏡検査を、眠るまで注射無しで行っていました。それはそれは痛いものでした。完全覚醒した状態で、直径1.5cm程の管が肛門から直腸、大腸に入ってくるのですから、まったくものじゃありません。看護師さんは「口で息を吐いてください」と言います。とは言うもののそんなことができません。大声で叫びます。更に看護師さんは追い打ちをかけて「おならはさる限りがまんしてね」。私は「そんなことを言わないでください」と心の中で叫びながら、「フッ、ぶぶ」と、おなを連発する始末...これくらい時間検査していたのか分かりませんが、私は1時間にも時間にも感じました。

検査後、ヘトヘトになって病室に戻りました。検査後は腹痛がりましたが、明らかに検査の影響による腹痛です。内視鏡検査は中を見やすくするために空気を入れているので、それがおな元の元になっています。

病室で待っている主治医が来られました。「ここで病気が告げられました。「急性出血性腸炎、薬剤性大腸炎」 病室、長っ！(一いつく)